



30

「通奏低音」

「10月19日のカナダ総選挙の結果は驚くべきものだ。多くの西側諸国に広がる右向きの流れに抗し、緊縮財政を拒む中道左派政権をカナダの有権者は受け入れた」。

裕層への増税と中間層への所得税減税。低金利を逆利用し5・5兆円規模の老朽化したインフラ改修事業。一定範囲内の財政赤字を3年間許容。シリア難民の受け入れ拡大とISISに対する空爆停止。そしてマリファナ合法化。

「このようなインフラ投資は、成長下の他の民主主義諸国にも強力なデモンストレーション効果を齎し得る。他の先進国と同様、カナダでも格差が拡大する中、超富裕層への増税を財源とする中間層への減税も価値が有る」。

宗旨替えかと思紛う程のFT紙の好意的論調。自治的多文化主義を提唱し、恋多きダンディーな生涯を全うした元首相ビエール・トルドー氏の長男だからかな。

その1ヶ月前の9月12日、イギリス労働党は新党首にジェレミー・コービン氏を選出。「人々はグロテスクな不平等と不必要な貧困にウンザリしている」と就任演説で語った彼は66歳です。

新首相に就任予定のカナダ自由党党首、43歳のジャスティン・トルドー氏を論評する「ザ・フィナンシャル・タイムズ」社説です。主な選挙公約は以下の通り。富

上下分離方式の民営化が複数の大事故を誘発した鉄道、並びに電力会社を再国営化。高所得者層への課税強化。熟練を要する仕事と実習生の枠を拡大。人が人の世話

をして初めて成り立つ医療・福祉・教育分野での予算削減を中止。そして核兵器廃絶。

「おとぎ話な人気取り」と捉えた最後の香港総督でオックスフォード大学総長のクリストファー・パッテン氏は、「英国人が如何に現実から目を背けているかを彼の勝利は浮き彫りにした」と皮肉りしました。3ポンド≒558円でウェッブ登録した若者が挙つて、何れも40代でオックスブリッジ卒業の他の3候補でなく、工科大学を中退したノーネクタイの人物に投じたのが心外だったのでしよう。

が、コービン党首は就任直後、トマ・ピケティ、ジョセフ・ステイグリッツ両氏を労働党の経済政策諮問委員会メンバーに選任。「賢明な強硬左派のスタンスであれば、繁栄と平等の両方の促進を主張できる」と党首選の最中に奇妙な「エール」を贈ったFT紙も、「本当の仕事はこれから始まる」と中道左派のトルドー氏に捧げた

無難な「エール」を再び吹き、様子見を決め込むかも知れません。トリクルダウンの雫は一向に滴り落ちず、経済格差が顕在化する先進国。フランス国民戦線党

首、欧州議会議員で43歳のマリィヌ・ル・ペンも2012年に自著で、経済的新自由主義とは「グローバル化され、ボーダレス化した支配階級の空疎なイデオロギーに過ぎぬ」と喝破しています。

古風な極右だった父親ジャン＝マリィル・ペンを同党から放逐し、人工中絶や同性愛を認める一方で、「金融業界と投機マネーを制御し得る強いフランス」を復権すべく、一部貯蓄銀行の暫定的な国有化と高所得者への課税率引き上げ、通貨フランの復活を掲げ、急速に若者層で支持を広げています。

「富民迎合」政治・経済からの脱却を唱えるトルドー、コービン、ル・ペン各氏への支持など「大衆迎合」の為せる技、と冷笑するのは簡単。とは言え、旧来の保守対立を超える「第三の道」路線で政権に就いた筈のトニー・ブレアもビル・クリントンも結局は「第一の道」でしかなく、更に「左寄り」だった筈のバラク・オバマも同様の「業績」で終わろうとする中での、大西洋両岸に於ける「左右」を超えた「通奏低音」。それは、市場経済の暴走に危機感を抱く有権者の深層心理です。

★次号12月号の発行日は11月27日(最終金曜日)です。